名古屋のまちなかを世界に開く

―― 中川運河の将来的利用価値

竹中克行

空間コードとは

▣時の断面から地域空間の持続的文脈を可視化する言語

▣「らしさ」を継承・進化させるためのコミュニケーションツール

▣人々に種を蒔いてもらうための苗床のデザイン

装幀：クレメンス・メッツラー

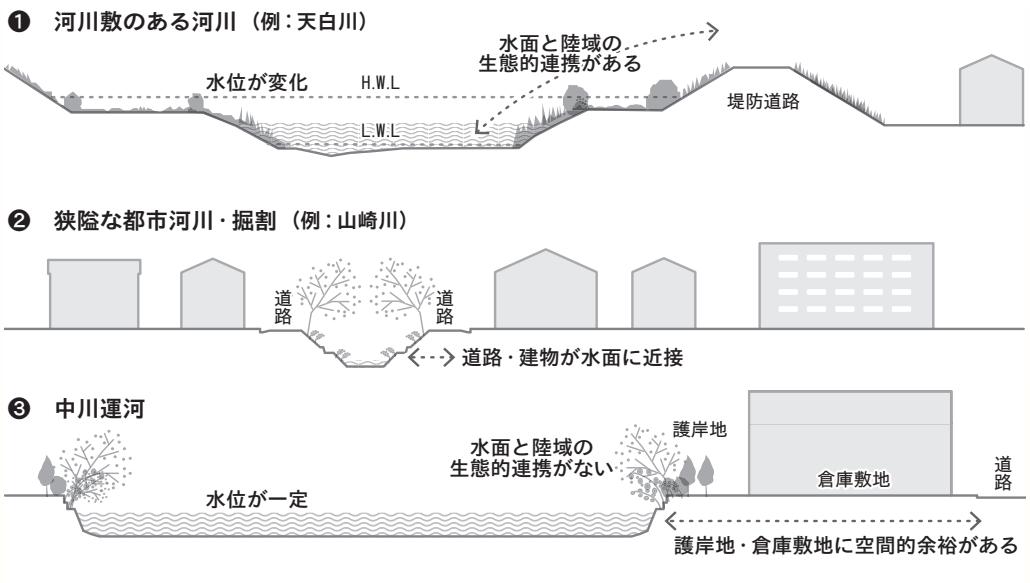
空間コードの考え方

❶都市のランドスケープ

❖土地と人の関わりがつくる都市の「不易」

❖基盤としての生態環境

❖百年の計を立てる計画・土木



水辺に発達したコリドー（回廊）

閘門式の中川運河は，水位が一定に保たれた人工水路という,半自然的なランドスケープをなしています。そのため，上流から土砂や栄養分が供給される通常の河川とは違って，水域と陸域の生態的連携が生じにくく，河川敷にヤナギ群落などが形成されることはありません。他方，市街地を流れる多くの水路がコンクリート護岸と道路で挟まれているのに対して，中川運河の場合，運河と一体で計画的に整備された両岸の敷地に空間的な余裕があります。その上に飛来する鳥が周辺市街地の植栽木から種子を運び，運よく発芽した幼木から，意図せずして迫力のある緑のコリドーが生まれました。中川運河は，生の自然に人間が手を入れることで新たな均衡に達した「セカンドネーチャー」だと言えないでしょうか。

空間コードの考え方

❷関係性の視覚的表れ

❖共同利用の作法を映し出す形象

❖「それとわかる」都市の空間構成

❖視覚が触発するシビックプライド

水路幅と建築物のスケール

倉庫敷地の事業者のなかには，運河側に植栽を施すものもあります。これには，裏庭的な意味だけでなく，対岸から見られることへの意識が関係しているようです。本線で60～90mの幅員と軒高10m余りの大きな壁面という水辺の姿かたちゆえに，両岸が過度に干渉することなく，互いに相手に顔を向けているような感覚が生まれるのでしょう（図右）。市街地の水路でも，小さな幅員の両側にマンションなどが屹立している場合は，プライバシー意識が先行して，対岸から目を逸らしたくなるかもしれません（同左）。中川運河のほとりで私たちが体感する「らしさ」は，土木のフレームと建築・緑の共演による部分が大きそうです。個性的な水辺の姿かたちは，未来の都市に対する私たちの期待や想像力を膨らませてくれます。

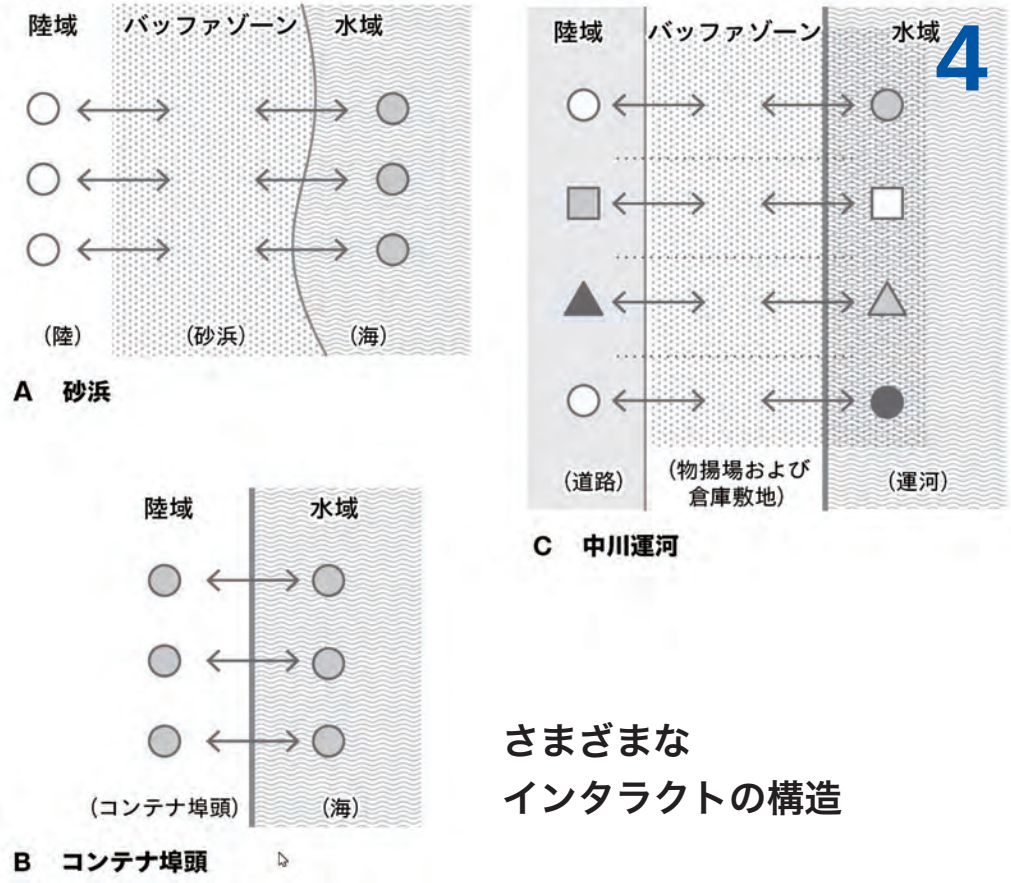
空間コードの考え方

❸「らしさ」を紡ぐ人々

❖ランドスケープを舞台とする町の立役者

❖空間を共同利用する人々

❖地域によって異なる当事者の顔ぶれ



将来的な利用価値を発見するためのヒントは，現在のカタチを必然とした人々による空間の使い方にあります。中川運河では，倉庫敷地を借り受けた事業者が水陸「両A面」とも言うべき個性的な町をつくりました。荷の組換えや原材料の加工の場となってきた中川運河の両岸は，コンテナを移し替えるだけの埠頭よりも，水浴客が着替えたり濡れた身体を乾かす砂浜の働きに似ています。中川運河には，水陸の両方に接続し，モード転換を行うバッファゾーンが備わっているわけです。そうした共同利用空間を都市の資産として，次の時代に向けて進化させる知恵が必要です。

空間コード研究の枠組み

理論

第Ⅰ部　空間コードとは

第Ⅱ部　中川運河を発見する

A
都市のセカンドネーチャー

B
共演する土木・緑・建築

C
時代を拓く市民のアリーナ

分析

第Ⅲ部　中川運河の空間コード

A1
海に向かう都市の層

A2
閘門式運河の水面

A3
人工の自然堤防

A4
緑のコリドー

B1
運河を挟んで向き合う

B2
インダストリアル空間

B3
鳥と風が運ぶ都市の緑

B4
連続体の美学

C1
名古屋の大静脈

C2
インタラクトする水土

C3
「自然」とのつきあい

C4
創造力の空間

データから発見する

第Ⅳ部　空間コードを発見する技

中川運河の隣人

運河景観の定点観測

運河に生える自然

蘇る運河建築

応用

第Ⅴ部　空間コードの応用

ワークショップとフィールドワーク

プロジェクト研究

中川運河コンペ　など

A1 海に向かう都市の層
――都心から海を臨む

■前近代の地理的想像力

名古屋村から伊勢湾を展望

フロンティアとしての臨海部

■土地の利用価値を高める

自然堤防上に立地した集落

干拓事業が生んだ新田集落

⇒ 名古屋をつくった人々には，都心から海を見渡す想像力があった

（資料）『尾張志』付図（愛智郡西，天保 15 年）

A1 海に向かう都市の層
――地表に露出する時間の層

❶熱田層
名古屋城／熱田神宮・・・

==松重閘門===

❷低湿地への入植
笈瀬村／露橋／八熊／篠原・・・

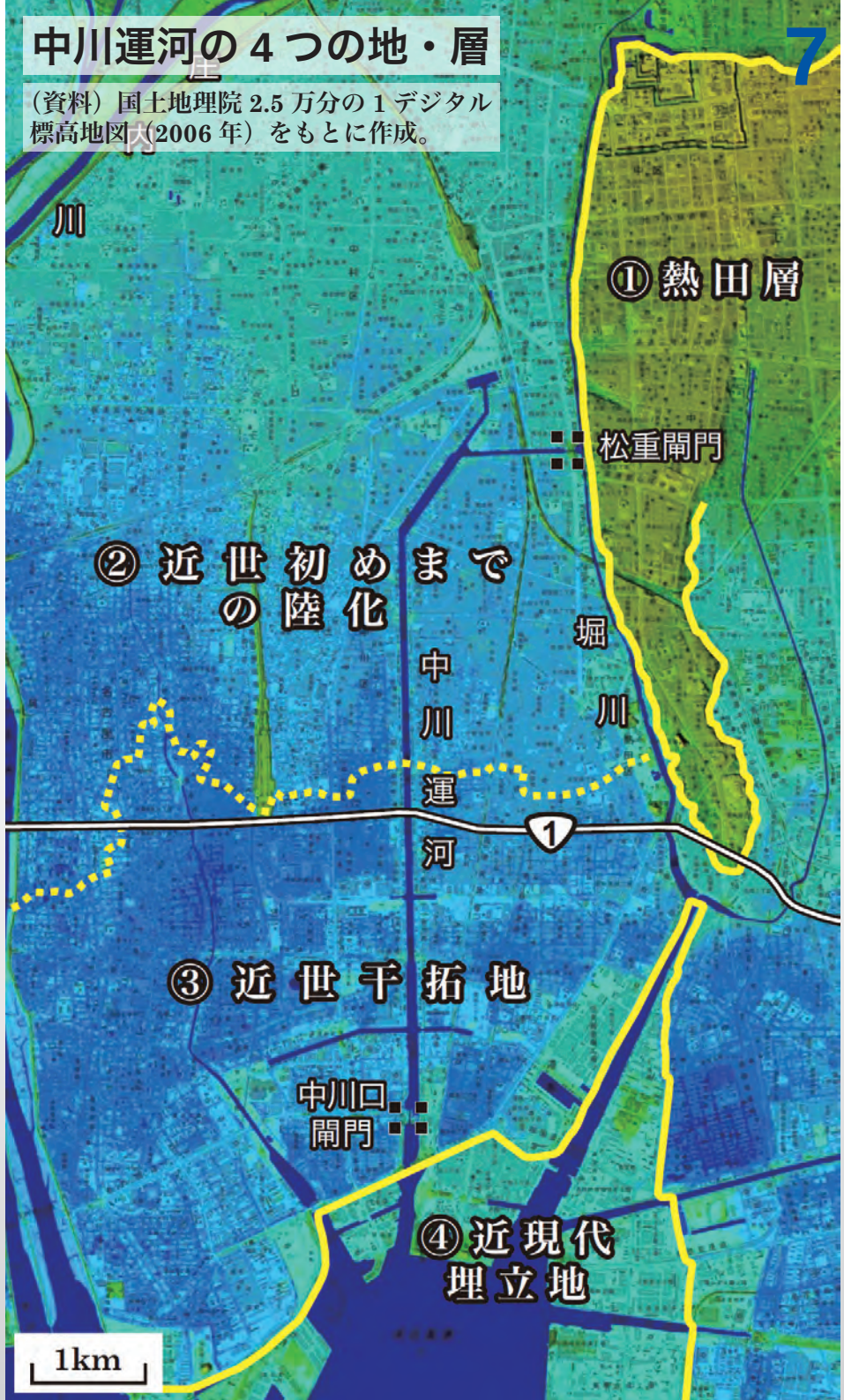
==国道１号線===

❸近世干拓地
熱田新田／熱田前新田・・・

==中川橋===

❹近現代埋立地
ガーデンふ頭／築地／金城ふ頭・・・

⇒　中川運河は，近世以来の名古屋に蓄積された時間の層を結ぶ交通路



A1 海に向かう都市の層
―― 「掘って盛る」土地利用

■「水郷」の土地改良

田舟の上から行う測量

運河土地式の区画整理

■「くね田」の知恵

2 段階の畝立てによる田畑づくり

「中川運河案内」が訴えた利用価値

⇒ 水路開削と土地改良という一石二鳥の開発は中川運河のエッセンス

開削当時の中川運河エリア

名古屋港管理組合所蔵資料

A1 海に向かう都市の層
――未来の都市を構想する力

■もう１つの地・層

運河が造った「人工の自然堤防」

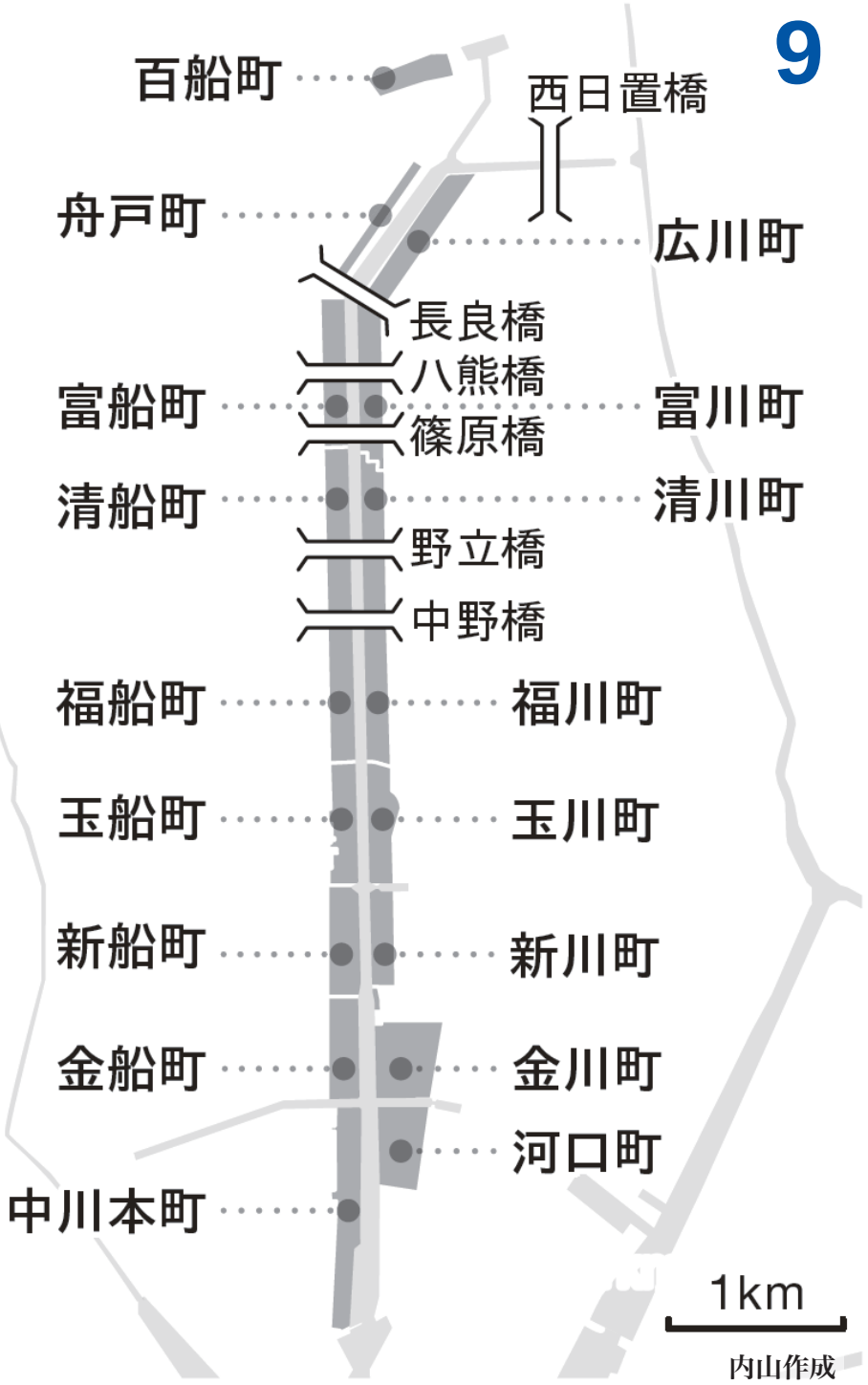
「船」と「川」に託された期待

■橋詰で交差する地・層

橋の名前に表れる前近代の町

運河とともに生まれた新しい町

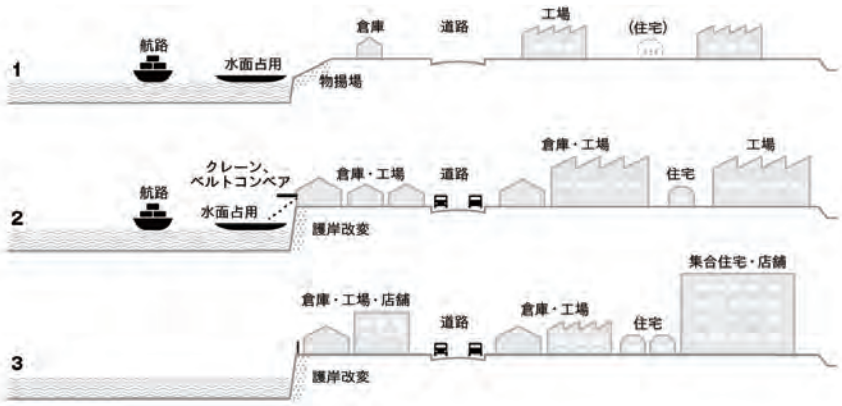
⇒ われわれには，運河に並行する道路にふさわしい命名ができるだけの構想力があるだろうか



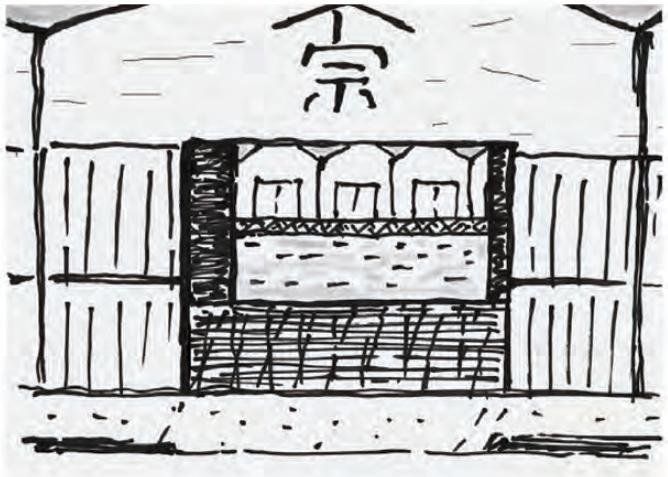
橋詰で交差する地・層

関連するその他の空間コード

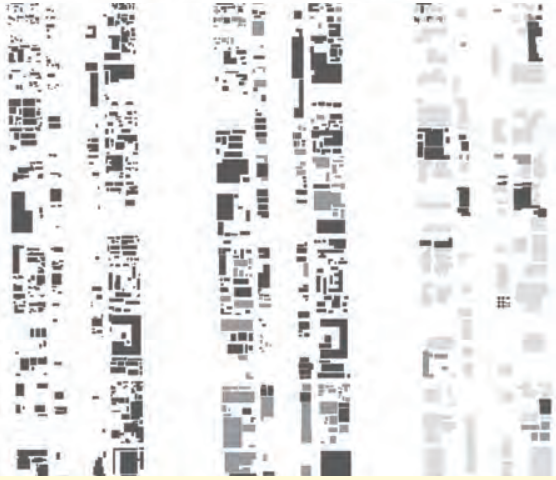
A3 人工の自然堤防



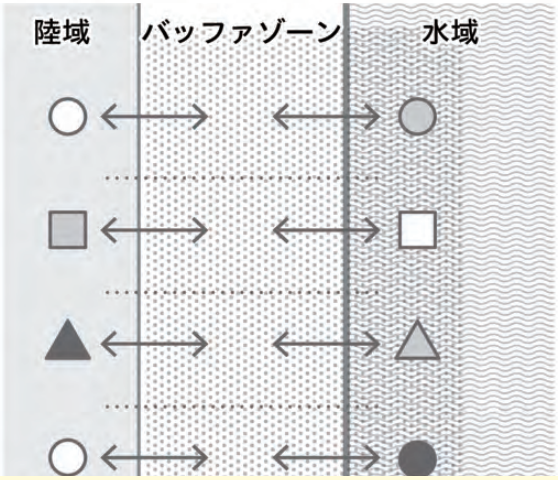
B1 運河を挟んで向き合う



C1 名古屋の大静脈



C2 インタラクトする水土



名古屋のまちなかを世界に開く

—中川運河の将来的利用価値に関する問い

【テーマ 1—都心と海を繋ぐ「細長い港」の可能性】

中川運河は，都心と外海を結ぶ水路であると同時に，随所で積み降ろしが可能な港湾として開発された。そうしたユニークさは，港湾都市・名古屋の将来にとって，どのような利用価値をもちうるだろうか。

【テーマ 2—近未来の「中川運河案内」がめざす方向】

開削当初，名古屋市は企業向けに「中川運河案内」を頒布して，運河両側の分譲地の利用価値を訴えた。90 年近く経った現在，新たな「中川運河案内」を作るとすれば，どのような積極的な価値を盛り込むべきか。

終